

新規試験研究計画（2003 年 1 月作成）

共通基盤 > 病害虫 > 虫害 > I - 2 - k

---

課題 I D : 03-05-05-\* -03-02

研究課題：農地の餌資源がカラス類個体数に及ぼす影響の解明

担当部署：農研機構・中央農研・耕地環境部・鳥獣害研

担当者名：吉田保志子、山口恭弘、藤岡正博

協力分担：

予算区分：交付金

研究期間：新 2002～2005 年度

---

## 1．背景・目的

鳥類による農作物被害ではカラス類によるものが面積でも量でも最大となっている。カラス類による被害は、作物や被害時期が多岐にわたるために個別の防除対策には限界があり、長期的には個体数を抑制する個体群管理が望まれる。

過去の食性調査の結果では、カラス類は水稻や麦類の収穫残渣を高い頻度で摂食しており、農業起源の餌が個体数に大きな影響を与えている可能性がある。しかし、農業地域に存在する餌量とカラス類個体数との関係はこれまで検討されたことがなく、また、食性調査が行われた 1950 年頃とは農業形態が大きく変わっている。そこで、農業起源の餌の発生管理による将来的なカラス類の個体数抑制をめざして、カラス類が農業起源の餌にどの季節にどの程度依存しているのかを解明する。

## 2．既往の関連成果

- ( 1 ) 「カラス科に属する鳥類の食性に就いて」( 鳥獣調査報告第 16 号(1957) )および「北海道に於けるカラスの被害と防除の研究」( 犬飼・芳賀(1953) )において、カラス類が稲穂や麦類を高頻度で摂食し、大部分は収穫残渣等と考えられることが示されている。
- ( 2 ) 玉田(1998)は、北海道におけるカラス類による農業被害が、ロールバックサイレージのフィルム破き、果樹、飼料作物ほか、合計 24 種類に及ぶことを報告している。

## 3．期待される成果

- ( 1 ) 農地の餌資源（収穫残渣など）の発生活長とカラス類の餌資源利用パターンの関係が明らかになる。
- ( 2 ) カラス類の個体数を抑制するために、発生を管理すべき餌資源の候補が明らかになる。

#### 4．全体計画

|                                 | 2002 年度 | 2003 年度 | 2004 年度 | 2005 年度 |
|---------------------------------|---------|---------|---------|---------|
| (1)カラス類の採餌環境利用の<br>季節変化を解明      | ←       |         | →       |         |
| (2)カラス類の集合地、行動圏<br>の把握          | ←       | →       |         |         |
| (3)採餌に割く時間の季節変動<br>から、餌不足の時期を推定 |         | ←       | →       |         |
| (4)採餌品目詳細調査                     |         |         | ←       | →       |
| (5)重要な餌の存在量とカラス<br>類個体数の関係を検証   |         |         | ←       | →       |

#### 5．初年度の具体的計画

採餌環境利用の季節変化の解明に適切な調査法を検討し、予備調査を行う。茨城県南地方において集合地（ねぐら）を探索し、集合地の分布から対象地域のカラス類の日常的な行動範囲を推定する。